

大東亜戦争（日支戦争・対英米戦争の8年戦争）の真実

（第3回）支那全土の共産化と英米追放の煽動・宣伝スローガン

---近衛声明「東亜新秩序」と尾崎秀実らの「東亜共同体」論---

【本編論考に関する注意書き】

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作からそのまま引用した部分。著作名、引用頁等は最下部に明示。

ただし、抜粋部冒頭の表題は、ブログ構成の都合上、私〔=ブログ作成者〕が付させて頂いた。

□ 内：中川八洋 筑波大学名誉教授の著作の要旨を変えずに、私〔=ブログ作成者〕が短く簡明に再構成したか、他の資料によって著作内容の補足をした部分。

□ 内の、（ ）書き・色文字：私〔=ブログ作成者〕の補足、〔 ）書き・傍点・アンダーラインその他すべて：著者 中川八洋による。

〔2〕日支戦争継戦（長期化）・支那からの英米追放の煽動スローガン「東亜新秩序」声明（1938年11月）

〔2〕-1 **ゾルゲ諜報・情報工作機関所属のソ連のスパイ、尾崎秀実（朝日新聞社出身）**について

近衛文麿のブレンであり同志であった尾崎秀実（朝日新聞社出身）が、国防保安法違反、軍機保護法違反、治安維持法違反によって巣鴨の拘置所にて絞首刑となったのは、日本の敗色濃い1944年〔昭和19年〕の、レーニンのロシア革命記念日にあたる11月7日午前9時33分であった。

11月7日が処刑に選ばれたのは、尾崎やゾルゲにとっての「祖国」〔尾崎は〈マイ・ホーム〉と呼んでいた〕の最大の祝祭日であったからで、ゴードン・プランケ博士は日本の官憲の一つの厚意であったという〔『ゾルゲ 東京を狙え』原書房〕。

・・・尾崎秀実は、ドイツの対ソ戦開始（1941年6月22日）の直後の1941年7月2日の御前会議での最高機密「日本はドイツに参戦〔（して）シベリア侵攻〕しない」やシベリア侵攻（＝ソ連への侵攻）の有無を示す実際の動員状況を分析し、ゾルゲを通じてロシアに通牒するなど、数々の輝くばかりの諜報〔インテリジェンス〕の実績からして、スパイ交換でモスクワの「祖国」に凱旋できるものと考えていた。

その自信からか、尋問には積極的に〔おそらく自分を英雄視して〕答えたために膨大な資料を後世に遺すこととなった。

尾崎は、自らが盗んだ機密情報〔諜報の分野〕を詳述しただけではない。

当代随一の中国専門家、評論家として該博な知識を披歴しつつ精力的に論陣

を張った、その『朝日新聞』、『中央公論』、『改造』などのマスメディアでの自らの論評について表現の裏に秘めた真の狙いまでしゃべり、煽動宣伝の手の内までさらけ出したのである。

このため、かなり高度なテクニクを駆使して自らの真意を隠していた、尾崎秀実の論評のすべてが彼の意図のとおり厳密かつ正確に解読できて、尾崎を美化しようとする後代の曲解を阻んでくれている。

〔2〕-2 尾崎秀実がもっていた（描いていた）アジアに関する構想について

尾崎は、1937年7月からの、このような世界大戦への動きの中で、アジアに関して、次の構想をもっていた。

（尾崎秀実）

「中国共産党が完全なヘゲモニー（＝主導権）を握った上での支那と、資本主義機構を脱却した日本と、ソ連と三者が、綿密な提携を遂げることが理想的な形と思われます」〔注1〕

（→意味：日支戦争の目的が毛沢東の共産党に支那全土を渡すことの意味）

〔注1：『現代史資料2 ソルゲ事件2』、みすず書房、197～210頁〕

さらに、この共産3ヶ国連合〔＝赤い日本／赤い支那／赤いロシア3ヶ国連合〕が、社会主義に革命した、それ以外の東アジアの諸国と提携する、より広域の「新しいアジア」をもって、尾崎は「東亜新秩序社会」と名付けた。

(尾崎秀実)

「英米仏蘭などから解放された印度、ビルマ、タイ、インドネシア、仏印、フィリピン等の諸民族を・・・前述の〔赤い日本・支那・露〕三中核体と政治的経済的文化的に密接なる提携に入る・・・。

この**東亜新秩序社会**においては・・・」〔注1〕

〔注1：『現代史資料2 ソルゲ事件2』、みすず書房、197～210頁〕

「**東亜新秩序**」は、近衛文麿が1938年11月3日に**声明**（近衛声明）を發して、「**日支戦争の大義**」を闡明した**スローガン**である。

それは、「**支那が東亜新秩序建設の任務を分担するまで**」との表現で、支那が**英米を追放して共産化**するまで**戦争を続ける**との**宣言**であった。

だから、（近衛文麿は）もし**国民党**がその**黨員を共産主義者に総入れ替え**すれば**和平に応じる**という、「**人的構成の改善**」なる、**不可能な和平条件**を提示したのである。

（→和平しない、和平できないようにするための《和平案》を提示したということ。）

(近衛文麿)

「**国民〔党〕政府**といえども〔英米協調の〕従来の指導政策を**一擲**し、その**人的構成を改替**して**更生**を挙げ〔れば〕、これを拒否するものにあらず」〔注2〕

〔注2：『朝日新聞』1938年11月3日付け、〕

「東亜新秩序」について尾崎秀実は、この近衛声明の直後に執筆した『中央公論』に発表したエッセーの中で、「東亜共同体」と同義だと説明している。

つまり、近衛の「東亜新秩序」とは、英米という自由社会の国々の影響がアジアから完全に排除された、東アジア全体の共産化の実現だと言い放つ。

尾崎は、近衛の意を寸分違わず正確に伝える、事実上の内閣報道官であった。

(尾崎秀実)

「〔近衛首相の〕〈東亜新秩序〉が帯びるべき特性と輪郭とは、・・・まさしく〈東亜協同体〉的相貌を示すものである。」〔注3〕

〔注3：尾崎秀実「〈東亜協同体〉の理念とその成立の客観的基礎」『中央公論』1939年1月号、1938年12月10日発売。『尾崎秀実著作集』第2巻、勁草書房、309頁〕

ところで、この「近衛声明」は有名で、現代史の専門家でなくとも広く知られているのに、なぜか、意図的に等閑視されてきた。

なぜなら、「近衛声明」は、日本の日支戦争の目的が、国民党が支那の統治権力を毛沢東に渡すまで、日本は戦争をやめないと世界に宣言したもので、「日支戦争は、1937年7月の盧溝橋事件とも、同年8月の上海大山事件とも、まったく無関係（に支那全土が共産化するまで遂行するもの）である」旨の暴露で

あった（からである）。

〔2〕-3 近衛文麿の暴走に、尾崎秀実の阿吽の二人三脚---事件を戦争へと 拡大させる、驚愕の煽動・宣伝（日支戦争：第一期プロパガンダ）

尾崎はこの小さな事件（盧溝橋事件）を**中国との全面戦争**にまでいかに拡大させるかが自らの**使命**だと考えた。

・・・要するに（尾崎は）**中国の唯一の政権**である**国民党政府**への**中傷誹謗**をなして日本全体にこれへの深い**侮蔑観**を**形成**し〔蒋介石政権は、日本の武力攻撃の対象にしてもよい程度のものとの誤った認識をさせ〕たのである。

「〔国民党政府は〕半植民地的・半封建的支那の**支配層**、国民**ブルジョア階級**」

「〔国民党政府は〕官僚〔郷紳〕**階級**、地主**階級**、および**新興資本家階級**、**軍閥**の代表者を主として構成されてゐる」

「国民党は**労働者農民**の**政党的勢力**を**根絶**すべくあらゆる精根を傾け尽くした・・・」

「国民党は党を以て国を治める建前をとってゐる。しかしながら国民党は事実かくの如き**寡頭的**・**血縁的**・**地縁的**・**ギルド的**な**支配**の性質を呈している」

「南京政府の**支配**は一種の**軍閥**政治と見ることができる」

（→マルクス主義、マルクス・レーニン主義の教科書通り！）

右記の（上記の）**煽動**は、**盧溝橋事件**（1937年7月7日）から**一か月**しか

たっていない8月10日に脱稿した『中央公論』9月号の尾崎論文「南京政府論」の一部である。

このような煽動が後日の近衛文麿首相の独断専行の、あの暴走「国民政府を^{あいて}対手とせず」声明〔1938年1月16日〕を支える〔不思議とは思わない〕日本国内のムードを先行的に形成していったのである。

この「国民政府を対手とせず」で、中国にたった一つしか存在しない講和の相手を否定した以上、日本は講和の道を自ら閉ざし、中国と永遠に戦争をするしかない事態に陥った。

近衛文麿首相は、むろん、このことを計画して国際社会のルールに反する暴走を決意したのである。日中戦争が終結するのは絶対に阻むべしとの、その信念によってであった。

・・・尾崎秀実の、この「日中戦争を拡大せよ!」「戦闘を長期化せよ!」との絶叫と煽動は次に掲げる、盧溝橋事件からわずか2カ月半後の9月23日に書いた『改造』臨時増刊号でも（ナチの）ゲッベルスのごとくに激しく執拗である。

「局地的解決も不拡大方針も全く意味をなさない」

「毒〔=武力のこと〕をもって制する方法しかない・・・」〔※〕

「日本の伸張せんとする力を阻止せんとするものに対しては、日本の本能は

ある場合は破壊力となつて爆破する」〔※〕

「一局部〔＝盧溝橋〕の衝突も全局〔＝全中国〕に拡大しなくてはならない

必然性を有している」

「日支関係の破局〔＝講和の道がまったくないこと〕は日本資本主義発展の

特殊事情性に即然としてこれに内在する」

最後の一節はレーニン著『帝国主義』などのマルクス・レーニン主義の公式見解そのものであり、尾崎はこのようにしばしば自らが共産主義者であるシグナルを堂々と出していた。

仲間にそうと知らせるためである。

なお、〔※〕は他人の論文の引用だが、尾崎はこれを「〔この〕論者の言は誤りではない」とはっきりと自分の意見であると明記している。

尾崎の、日中戦争煽動、つまり講和に反対させるための様々な嘘宣伝はつづく。

次の論文『長期抗戦の行方』〔『改造』1938年5月号〕もその一つである。

（尾崎秀実）

「・・・新しい幾本かの墓標が立ち、幾人かの若き友人たちは大陸から永久に返ってはこない。・・・だが、戦に感傷は禁物である」

「日本国民が与えられてゐる唯一の道は戦に勝つといふことだけ。・・・その

ほかに**絶対に行く道がない**といふことは**間違ひのないこと**」

「日本が支那と始めたこの**民族戦の結末**を附けるためには、**軍事的能力**をあ
くまで発揮して**敵の指導部の中枢を殲滅する以外にない**」

「元が南宋〔を滅ぼすのに〕・・・**45年**かかっている」

「清〔が明を滅ぼすのに〕・・・やはり**46年**かかっている」

要するに、尾崎は、広く**日本国民**に、元〔モンゴル人〕や清〔満州人〕の漢
民族征服にかかった数十年の歴史を持ち出してまで、**〔超〕長期の戦争をすべき
だ、講和は絶対にしてはならない、と煽りつづけている**のである。

また、ここでモンゴル族や満州族を持ち出したのは、漢民族の支那を多民族
〔日本〕が支配することは不自然ではない、との**宣伝**を兼ねているからである。

もうひとつの論文も同様に、支那との戦争を**長期的に続行**することの正当化
の煽動・宣伝をなしている。

戦争の基本が**即戦即決**を旨とするのは**兵法のイロハ**、1938年の当時ではまだ
この常識が陸軍でも国民でも多数意見だったから、それをつぶすのを狙っての
論文である。

〔以下、尾崎秀実「長期戦下の諸問題」『**中央公論**』1938年6月号〕

「一部に**弱気らしい見解**〔=講和論のこと〕が生れつつある・・・この程度
の弱気〔=講和の主張〕もまた**有害**にして**無意味なもの**として斥けたい」

「もはや中途半端な解決法といふものが断じて許されない」

「唯一の道は支那に勝つといふ以外には無い・・・^{おもて}面をふるることなき全精力的な支那との闘争、これ以外に血路は断じてない」

「支那との提携が絶対に必要だとする主張は・・・意味をなさない。敵対勢力として立ち向かふものの存在する限り、これを完全に打倒した後、初めてかかる方式を考ふべきであらう」

〔2〕-4 近衛文麿「東亜新秩序」声明と尾崎秀実「東亜協同体」論の二人三脚（日支戦争：第二期プロパガンダ）

「第二期プロパガンダ」、すなわち、「東亜共同体」キャンペーンについては、尾崎は「近衛声明」のあと、直ちに開始した。

尾崎論文の掲載された『中央公論』誌の発売日は1938年12月10日だったから、「近衛声明」（1938年11月3日）の約一ヶ月後である。

そこで尾崎は、日支戦争の意義と目的を次のような大枠の中で、これまで以上に自信をもって語る事ができた。

- ① 「東亜共同体」は「日・満・支経済ブロック」を創ることではない。
- ② 「東亜共同体」は、社会主義・共産主義の理念が実現したもの。
- ③ 支那戦線での戦死は、「東亜共同体」という遠大なユートピア実現の犠牲であって、日支戦争は国益や盧溝橋事件等の解決などを目指してはいな

い。

④ 日本も、「東亜共同体」のため、**社会主義・共産主義国に改造されるべき**こと。

① について言えば、尾崎は、例えば、支那には鉄／石炭／タングステン／アンチモニーの資源がふんだんに埋蔵されているが、「東亜共同体」づくりの日支戦争は、そのようなものの開発・生産には全く関係しないと、一刀のもとに斬り捨てる。

現実には、その通りであった。日支戦争を止めない限り、日本が点と線でしか掌握していない支那で、採掘・精錬などこれら鉱山の資源を開発しても小さなゲリラ的な攻撃を受ければ、いつでも破壊的に阻止される。

経済学的に資源開発をするには、日支戦争が止んだ**平和こそが前提**である。

つまり、経済学的には、日支戦争（戦争遂行）と「東亜共同体」は**両立せず対立関係**にある。

(尾崎秀実)

「これらの資源を追求して果てしなう夢を拡大することは、・・・慎み深くなくてはならない・・・。資源追求主義・・・を中核とする経済ブロック論のごときは・・・開発資金の問題において、治安の問題において、はたまた戦争と

遂行と睨み合わせた一般的な経済上の余裕の問題において、成り立ちえない」

〔注4〕

② については、「資本主義の**対極的・対立的な理念**」と、間接表現でさらりと明示している。

(尾崎秀実)

「〈**東亜協同体**〉の**理念**が日本資本主義**現状維持派**によって支持される理由は**あまりないはず**である」〔注4〕

3ヶ月後に執筆した『東亜問題』での論文では、尾崎はもっと直截に、資本主義〔市場経済〕イデオロギーと激突するだろうと、「**東亜共同体**」の**理念**が**社会主義・共産主義**であることを、よりはっきりわかるように書いている。

(尾崎秀実)

「今後、東亜協同体の**純粹なる指導原理**が拡充され、かつこれが実際政策に適用されんとする場合には恐らくは**強力なる摩擦**を**国内の資本主義陣営**との間に**生ずるにいたる**のであろう」〔注5〕

③ については、**共産主義者特有の、未来に到来する**（と妄想する）「**地上のパラダイス**」を創るために現在の人間は誰であれ**その生命を捧げるべき**だとする、あの**残忍冷酷**というより限りなく血を欲した「**人類史上最凶のド**

ラキュラ」レーニンの論理そのものである。

レーニンの年平均殺戮数の方がスターリンより多いし、チェーカー〔のちの KGB〕という令状なし裁判なしの逮捕・拷問・処刑の制度をつくったのも、強制労働収容所をつくったのも、スターリンではなくレーニンである。

(尾崎秀実)

「〔日支戦争で〕国家の犠牲になった人々は絶対に何らかの代償を要求して尊い血を流したのではない（＝純粋に国家の犠牲になることを欲した）とわれわれ〔共産主義者〕は確信する……。東亜に終極的な平和〔＝共産社会〕をもたらすべき〈東亜における新秩序〔米英の放逐とスターリンの支配〕〉の人柱となることは、この人々の望むところであるに違いない」〔注4〕

④ については、例えば次のような、回りくどい表現をしている。尾崎ほどの大物でも、治安維持法にはかなり神経を使っているのがわかる。

(尾崎秀実)

「東亜協同体の理念が実践の過程を伴って発展しうるか否かということ
は、……日本国民の再編成〔＝共産主義者になること、および大規模な共産党の組織づくり〕を行う必要がある……。〈東亜共同体〉論の発生が他の同系の理論と異なる点は、自国の再組織〔＝日本の国家体制の共産化〕へ想い至った真剣さにある」〔注4〕

〔注 4：尾崎秀実「〈東亜共同体〉の理念とその成立の客観的基礎『中央公論』
1939年1月号。『著作集』第2巻、311頁、310頁、313頁、318頁〕

〔注 5：尾崎秀実「東亜新秩序論の現在および将来---東亜協同体論を中心に」
『東亜問題』1939年4月号。『著作集』第2巻、355頁〕

■ **ファシズムと社会（共産）主義は同根のイデオロギーであり、「ユートピア幻想」にすぎず、それは人間を「神罰・天罰」にしか導かないことを知れ！**

ハイエク曰く、

「〈ファシズム〉と〈共産主義〉を研究対象としてきた人々が、彼らの当初の期待に全く反して、この両体制下における諸条件は、多くの側面において驚くほど似ている事実を次々と発見して、衝撃を受けている。

・・・レーニンの旧友マックス・イーストマン氏曰く、

《スターリニズムはファシズムより良いものであるどころか、もっと悪く、もっと冷酷であり、もっと野蛮であり、もっと不公正であり、もっと不道徳であり、もと反民主主義的であって、いかなる希望や良心によっても取り返しのつかないもの》で《超ファシズムと呼ぶべきもの》〔注 3〕であると。

米国の通信社の特派員として12年間ロシアに滞在し、彼の理想がこなごなに壊されてしまった W・H・チェンバリン氏曰く、

《社会主義少なくともその初期においては、自由への道ではまったくなく、

独裁体制の推進を図る側と反独裁に徹しようとする側の間における最も激しい市民戦争への道であることは、もはや明らかである。民主主義的手段によって実現され維持される社会主義などということは、ただのユートピアの世界の話にしか過ぎないと言うことは、もはや決定的なことに思える》〔注4〕

ウォルター・リップマン博士曰く、

《われわれが属している世代は、今や経験から、人々が自由を手放し、生活の様々な面にわたる強制的な組織化へと退却していく時、何が起こるかを学びつつある。より豊かな生活を目指すつもりでしたが、実際にはそのより豊かな生活を自ら放棄するのを余儀なくされてしまう、という教訓である。つまり、組織化された指令が増えれば増えるほど、各自のもっている多様な目的は画一化への道をたどるのを、どうにも避けることができなくなってしまふ、ということだ。それは、計画社会や独裁原理を人間生活へと適用したことに対する、天罰なのである。》〔注6〕

〔注3 : *Max Eastman, Stalin's Russia and the Crisis of Socializm, 1940, p.82.*〕

〔注4 : *W.H. Chamberlin, A False Utopia, 1937, p.202-3.*〕

〔注6 : *Atlantic Monthly, November 1936, p.552.*〕

(出典 : ハイエク『隷属への道』、春秋社、28～30頁)

〔2〕-5 日支戦争第二期プロパガンダ : その他の共産主義者・社会主義者

の「東亜共同体」論---共産主義者・共産党員：杉原正巳、三木清 社会主義者：
蠟山正道・宮崎正義 等

尾崎秀実以外の共産主義者・共産党員〔備考〕の「東亜協同体」論は無数にあるが、杉原正巳と三木清のが、彼らが尾崎秀実とともに近衛文麿首相の最側近ブレンであったことにおいてやはり優先的に重視すべきだろう。

〔備考：当時の知識人で共産主義者のほとんどは、治安維持法の存在もあって、共産党員にならないのが通常であった。堂々と党員になった河上肇や三木清は、この点で珍しい〕

・・・近衛文麿／尾崎秀実／杉原正巳／三木清という純度 100%の共産主義者 4 人組こそが、スターリン〔ソ連共産党〕とも密な連携のもとで、アジア共産化のための日支戦争を長期化させるドグマとして、この「東亜共同体」の理論を完成させた・・・意味で、この 4 人組は、日本国に対する国家叛逆の「悪の 4 人組」であったと断罪されねばならない。

・・・共産党員であった三木清の論考「東亜〔共同体〕思想の根拠」・・・は、近衛文麿から事前に依頼されていたらしく、近衛声明とほぼ同時に発刊された雑誌の巻頭論文となった〔『改造』1938年12月号〕。

（三木清）

〔東亜協同体の建設は〕我々の民族〔=日本民族〕の世界史的使命〔=アジ

ア共産化)を強調する立場に立たなければならぬ」

「この東亜の新秩序〔=アジアが共産主義で結びつく〕のうちに自ら入つてゆくべきものである以上、日本も日本の文化もこの新秩序に相応する革新〔=日本の共産化〕を遂げなければならぬ。・・・国内の革新と東亜協同体の建設とは不可分の関係にある。」〔注8〕

〔注8：三木清「東亜〔協同體の〕思想の根拠」『改造』1938年12月号、20頁〕

「東亜共同体」論の真打ちであった коммуニスト杉原正巳は、日支戦争が通常の戦争から、マルクス・レーニン主義のもとでの、スターリンのソ連を頂点とするグローバルな共産主義体制を建設する戦争の、そのアジア地域版に変わってきていることを、歯に衣を着せず力説する。

(杉原正巳)

「支那事變の目標は、不拡大→局地解決→抗日政權の膺懲→南京政府を相手とせず→日支両民族提携のための聖戦→長期戦→長期建設→東亜新秩序の建設→東亜協同体の建設、といふやうに変化していつた」〔注9〕

「支那事變の戦ひの大義は、かくて無限大に拡大され、今日の世界史の課題たる〔マルクスの『共産党宣言』が命じる〕階級と民族の問題とを、同時に新しき秩序〔=スターリンを戴くアジア共産社会〕の下に解決せんとしてゐるの

である」〔注 9〕

〔注 9：杉原正巳『東亜共同體の原理』、1939 年 2 月刊、モダン日本社、5
～7 頁〕

支那事變の長期化について、「近衛が優柔不断であったから」とか、「英米が
蒋介石を支援したから」というのはすべて、戦後に創られた**真赤な嘘**---歴史を
捏造するための**偽情報**---にすぎない。

日支戦争〔支那事變〕の**真実**とは、**杉原正巳**が言うように、最終の**アジア共
産化**の中核となる**日支両国の共産体制**〔もしくは社会主義体制〕を**完成**させる
まで、日支戦争を**続ける**ことであつたし、それが**近衛内閣の強固な意思**であつ
た。

尾崎秀実とともに**ゾルゲ事件**で逮捕されながら、その祖父が公爵の**西園寺公
望**という**元老**であつたため、**コミュニストの西園寺公一**は、政治的に配慮され
て**執行猶予**となつた。

実質的な**処罰の免除**である。「**ボルシェヴィキ貴族**」との異名をもつ**公一**は、
戦後、**ソ連共産党のフロント組織**である**世界平和協議会**で働くなど、終始「**ソ
連の正式工作員**」であり続けた。

また**西園寺公一**は、熱烈かつ狂信的な**毛沢東**〔**中国共産党**〕**崇拝者**でもあつ
たから、毛沢東の近くにいたいと、未だ日中国交がない 1958 年から 1970 年

までの12年間半、北京市に家族を連れて移り住んでいた〔注10〕

〔注10：西園寺公一『貴族の退場』、ちくま学芸文庫、253頁。なお、この文庫本での解説は、マルキストの菊池昌典だから、西園寺公一の像も近衛文麿の像も、真実を転倒した偽りの虚像で描かれている。〕

この西園寺公一は、“共産支那”を創る（近衛声明）「東亜新秩序」の意味を正しく把握していた。そして、近衛文麿の「同志」としての任務を果たすべく、例えば、次のように「東亜新秩序」を煽った。

「東亜新秩序は、〔日本も支那も共産社会になるから〕東亜千年の共栄を目標としたものであり、既往二年有余の以来、わが国が費やした幾多の生命と膨大な資材とによつて獲た幾百の戦闘は、・・・新しい支那の興国〔=中国共産党が支配する赤い支那の誕生〕を援け、〔共産社会として〕共に存し、共に栄えるの道を拓かうといふのである」〔注11〕

〔注11：西園寺公一「政治上層部の時局認識を質す」『中央公論』1939年10月号、329頁〕

さて、尾崎秀実や杉原正巳のほかにも、加田哲二の『東亜協同體論』や新明正道の『東亜協同體の理想』など「東亜共同体」論の著作は実におびただしく発表され、出版された。

・・・新明（正道）は、現代史がこれまで看過してきた、「近衛声明」以降の、

日本の知識人たちが、猫も杓子も大量に左傾化・極左化した、当時の状況を今に伝えてくれる・・・。

(新明正道)

「東亜協同体の思想が知識階級を獲得した」

「その理論的な具体化によって知識階級を近衛声明の支持者たるに至らしたところに、東亜協同体論の蔽ひ難い国策的な貢献が存している」〔注 12〕

〔注 12：新明正道『東亜協同體の理想』、日本青年外交協会出版部、1939年 10 月刊、197～199 頁〕

「東亜共同体」論は、知識人を、蜚語に過ぎない「東亜共同体」にめがけて走らせることであった。それによって知識人が一瞬にして、レーニンの『帝国主義』のイデオロギーを共有してしまう、つまり洗脳されることも狙いであった。彼らが 2～3 年後に日本の亡国も意に介せず、英米に対する戦争に熱狂する“反日の狂気”に溺れていく、決定的な麻薬効果を五文字魔語「東亜共同体」は発揮したのである。

いかなる知識人も、いったんマルクス・レーニン主義に汚染されれば、知識人ではありえない。左傾化・極左化した知識人とは、正しき人間性も、真の知性も喪失して、妄想に真理を幻覚するカルト宗教の折伏師でしかない。

〔〔2〕 -1：中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、22～24 頁〕

〔2〕 -2 : 中川八洋『亡国の「東アジア協同体」』、北星堂、184～186 頁)

〔2〕 -3 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、194～197 頁)

〔2〕 -4 : 中川八洋『近衛文麿の戦争責任』、PHP 研究所、198～204 頁)

大東亜戦争（日支戦争・対英米戦争の 8 年戦争）の真実 第三回（完）

平成 26 年 1 月 21 日 バークを信奉する保守主義者



（第四回「(仮) 南進と対英米戦争へ導くスローガン『大東亜共栄圏』」へ続く)